

上侍塚出土鏡と下侍塚出土鏡の研究試論

やまこし しげる
山越 茂

- | | |
|------------------------------|------------------|
| I はじめに | V 『下野國誌』から見た出土鏡 |
| II 上侍塚・下侍塚に関する各書の記録 | VI 『葬礼私考』から見た出土鏡 |
| III 「湯津神村車塚御修理」・『那須記』から見た出土鏡 | VII 上侍塚・下侍塚の出土鏡 |
| IV 『那須拾遺記』から見た出土鏡 | |

下野国の那須地域には、前方後方墳の集中域であるとともに、舶載鏡の出土例が周知されている。そして、上侍塚・下侍塚の両塚は、那珂川流域に所在している代表的な前方後方墳である。両塚は、日本考古学史上、先駆的な発掘遺跡として、重要な位置を占めている。両塚は、那須国造の墓誌の究明を目的として、元祿五（1692）年に発掘が行われている。その際、両塚からは、前期古墳の代表的な遺物・鏡を始めとして、多くの遺物が発見されている。出土遺物は、墳丘内に再埋納されてしまっているので、もはやいかなる鏡式の鏡かを明瞭化し得ない。しかし、各書に記載されているので、それに従って、鏡式を想定することができる。両塚出土鏡については、三木文雄氏・斎藤忠氏の見解がある。上侍塚出土鏡の場合、三木文雄氏は、鋸歯文鏡か捩文鏡かとしていて、斎藤忠氏は、捩文鏡としている。また、下侍塚出土鏡の場合、三木文雄氏は、盤龍鏡としていて、斎藤忠氏は、盤龍鏡か竜龍鏡かとしている。これらの見解を参考にして、筆者の見解を記載すれば、上侍塚出土鏡は、獸形鏡から変化した捩文鏡、下侍塚出土鏡は、舶載の両頭式盤龍鏡（龍虎鏡）であった可能性が高いと思われる。両頭式盤龍鏡（龍虎鏡）のなかでも、恐らくは、旋回式の形式に属するものであろう。

I はじめに

下野国の前方後方墳は、現在見るとところでは、19基の墳墓が発見されている。同国は、最近になって、前方後方墳の増加の一途を辿っていて、この集中域として、着目しねばならない。

古墳時代は、水稻農耕を生産基盤として、国家としての統治機構が出現していく時代であるとともに、統治機構内の豪族層と一般農民層との格差が顕著に開いてくる時代である。当時にあっては、生産基盤は水稻農耕であって、このためには河川に依拠せざるを得ず、河川流域には、当時の遺跡が立地することもまた、当然なところである。下野国の中央部を南下する最大の河川・鬼怒川でもって二分すれば、鬼怒川東側地域には、13基の前方後方墳が見え、鬼怒川西側地域には、6基の前方後方墳が見える。筆者は、以然に、同川を境界線として、東西の二

地域に区分し、記載を進めてきたところである⁽¹⁾。

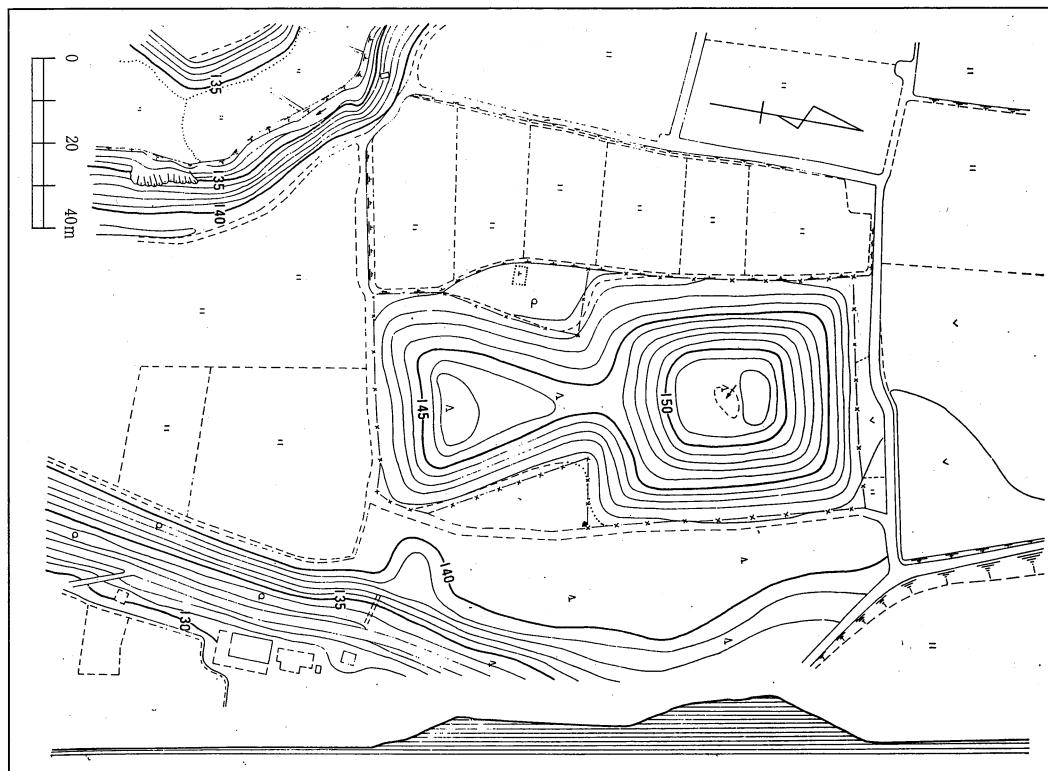
下野国を俯瞰すると、南から北へと縦断する形でもって、関東平野の北縁を占める平地が展開している。古墳は、主として、中央部から南部へと続く台地あるいは低地の河川流域に分布している。同国の河川は、巨視的には、利根川水系と那珂川水系に二大別されている。前者は、同国の大半の地域を流下して利根川へと流入する河川である。主なる河川は、鬼怒川・五行川・小貝川・田川・思川・姿川・黒川・渡良瀬川などである。後者は、同国の北東部を流下して太平洋へと直接流入する河川である。主なる河川は、那珂川・篠川・荒川・江川・内川などである。そして、同国の古墳は、大局的には、これらの河川流域に所在していることになる。

芳賀地域は、鬼怒川東側地域に占拠していて、下野国最大の七基の前方後方墳が発見されている。同地域の前方後方墳は、河川流域ごとに整理すれば、五行川・小貝川の二河川流域に存在している。前者では、下流域には、亀の子塚⁽²⁾が見られ、上流域には、浅間山⁽³⁾が見られる。後者では、下流域には、入定塚⁽⁴⁾・浅間塚⁽⁵⁾・山崎1号⁽⁶⁾が見られ、上流域には、二子塚三号・二子塚一号⁽⁷⁾が見られる。また、那須地域は、同様な地域に所在していて、同国第二位の六基の前方後方墳が確認されている。同地域の前方後方墳は、同様に整理すれば、那珂川流域に限定し得る状態にしか過ぎない。同川流域では、下流域には、八幡塚⁽⁸⁾・温泉神社⁽⁹⁾・大塚⁽¹⁰⁾が見られ、上流域には、上侍塚⁽¹¹⁾（第1図）・上侍塚北塚⁽¹²⁾・下侍塚⁽¹³⁾（第2図）が見られる。大塚の場合、所在地は、同川に流入する権津川沿いにあるので、同川流域というより権津川流域とした方が適当かも知れない。なお、下流域・上流域の名称は、古墳の所在地に使用したものであって、河川自体の下流域・上流域という意味ではないことを付言しておく。

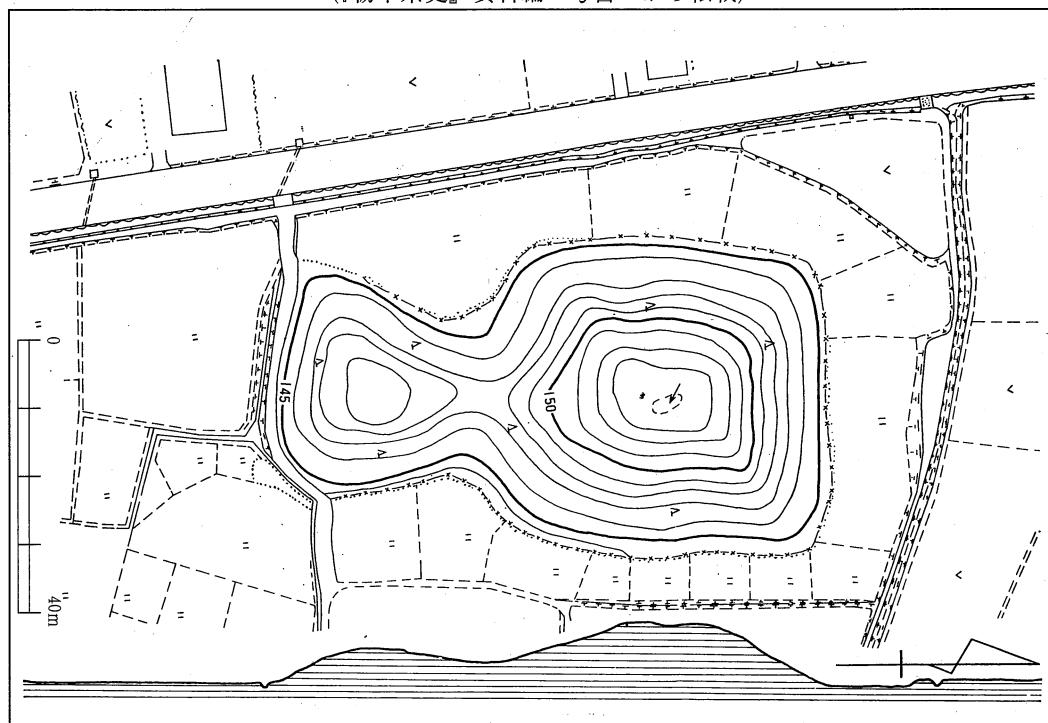
河内地域は、鬼怒川西側地域に占拠していて、五基の前方後方墳が指摘されている。同地域の前方後方墳は、河川ごとに整理すれば、田川流域に限定し得る状態にしか過ぎない。同川流域では、上流域には、大日塚⁽¹⁴⁾・愛宕塚⁽¹⁵⁾・権現山⁽¹⁶⁾が見られ、下流域には、三王山南塚1号⁽¹⁷⁾・三王山南塚2号⁽¹⁸⁾が見られる。寒川地域の前方後方墳は、同様に整理すれば、巴波川流域の大桙塚⁽¹⁹⁾に限定し得るにしか過ぎない。足利地域の前方後方墳は、同様に整理すれば、渡良瀬川流域の観音山⁽²⁰⁾に限定し得る状態にしか過ぎない。本墳の場合、分布地は、渡良瀬川に流入する矢場川沿いにあるので、渡良瀬川流域というより矢場川流域とした方が適当かも知れない。なお、本墳は、町村合併に際して、群馬県から栃木県へと編入されたものであり、上野国の前方後方墳に相当し、下野国の範疇の前方後方墳とは言い難い。

II 上侍塚・下侍塚に関する各書の記録

さて、筆者は、これまで、下野国の前方後方墳について簡単に叙述してきたところである。同国の那須地域では、上侍塚・下侍塚の二基の前方後方墳からは、それぞれ一面ずつ、あわせ



第1図 上侍塚古墳
(『栃木県史』資料編・考古一から転載)



第2図 下侍塚古墳
(『栃木県史』資料編・考古一から転載)

て二面の鏡が発見されている。ここでは、上侍塚出土鏡・下侍塚出土鏡は、いかなる鏡式の鏡であったかを考察しておくこととする。

「那須国造碑」の碑堂工事の際、碑のあった塚状の盛土を発掘したが、何も出現しなかった。そこで、周辺にある「那須国造」の墓として、上侍塚・下侍塚の二基の前方後方墳に着目したのである。そして、二基の前方後方墳は、元祿五（1692）年に発掘が実施されている。上侍塚・下侍塚のいずれかが那須国造直韋提の墓ではないかと考えた徳川光圀・儒臣佐々介三郎宗淳は、発掘によって姓名を刻した墓誌を求めようとしたのである。「那須国造碑」には、「那須直韋提」という碑文が刻されており、直は姓であって、韋提は人名であるのが定説となっている。光圀らは、「那須直韋提」を「那須宣事提」と誤読し、官名と考えたのである。このため、誤読によって、姓名が不明となってしまい、それを是非とも知りたいという学問的な意図でもって、両塚の発掘となったのである。両塚からは、もちろん、誌石は発見されなかつたが、貴重な遺物の出土を見ている。光圀は、誌石が発見されなかつたことを知るや、直ちに西山から絵師を派遣して、遺物の図をとらせるとともに、出土遺物を松板の箱に入れ、蓋の内側に自ら筆をとて銘文を認めると、各古墳内に再埋納させたのである。

現在では、もはや上侍塚・下侍塚の両塚出土の遺物を実見することができないが、当時の記録が残存しており、出土品を知るには、好個な資料となっている。遺物を記録した文献には、「湯津神村車塚御修理」・『那須記』・『那須拾遺記』・『下野國誌』・『葬礼私考』の五つが残っている。「湯津神村車塚御修理」は、発掘の当事者である大金重貞の筆になるものであり、元祿五（1692）年申二月とあるので、発掘当時の記録として、重要視すべきものである。両塚の出土品として、二区分されていて、それぞれの遺物が掲出されている。『那須記』もまた、発掘の当事者の大金重貞の筆になるものであり、延寶五（1677）年二月に徳川光圀に献本の後、両塚の資料を付加したものが明治二五（1892）年一〇月に発刊されている。しかし、この文献は、「湯津神村車塚御修理」と異なり、両塚の出土品としての区別がなく、両塚のものを一括して記録している。『那須拾遺記』は、木曾武元の著作であり、享保一八（1733）年に成立したものである。両塚の発掘から約40年後のことであり、木曾武元は那須の住人であるので、大金重貞の著作を参考にしたものであろう。『下野國誌』は、河野守弘の著作であり、文久元（1861）年酉九月編集とある。両塚の発掘から約170年後のことであり、何らかの参考文献を必要としねばならない。両塚出土のものをそれぞれまとめているとともに、大金重貞の「湯津神村車塚御修理」と同様な誤謬を犯しているので、同書を踏襲したものかと思われる。『葬礼私考』は、栗田寛の著書であり、慶応二（1866）年丙寅九月廿六日脱稿の付録として刊行されている。付図の「古鏡及土器圖」中には、両塚出土の遺物が掲出されている。斎藤忠氏^④に依れば、栗田寛は、水戸藩の学問所・彰考館物書役となっている。本書に使用した図は、彰考館

所蔵の図であり、光圀が絵師に命じて描かせたものではなかつたろうかとしている。したがつて、『葬礼私考』の付図は、大金重貞の「湯津神村車塚御修理」の図とは異なつてゐることにならう。

III 「湯津神村車塚御修理」・『那須記』から見た出土鏡

「湯津神村車塚御修理」は、発掘を直接担当した大金重貞の筆である。同書に依れば、上侍塚の規模は、「川下ニ車塚有、是ヲ上侍塚と世言ニ申傳也、塚ノ頭長十貳間、但シ北より南へ長也、東より西へ貳十八間、此塚より前へ築出シ長貳十一間、横ニ築ル事長廿四間」とある。
そして、出土遺物は、「右ノ塚五尺余堀申候所ニ矢ノ根拾八本、甲鎧破五ツ、其下ヲ堀候所ニ、先へな土ニテヌリ、其内ヲ黒土也、漆ノねり土也、其内ニ朱少々有リ、其土ノ外ニセとモノ壹貳ツ筆チク大サ也
寸ノクタ有、又やきものニテ虎ノ嶋ノ如ニテ、高サ七分、下ノ指渡貳寸四分、上ノ指渡壹寸八分、輪ノアツサ三分、色トイロタツスチ有、横ニ帶筋有、此外ニ鉄の折有、長四寸五分壹ツ、但シ蠟如ノイホ壹寸貳分有モノ付申候、鉄折、三寸四分、廻四寸、中二穴長く有、穴脇ニねコノ手ノ如成モノ付申候、指渡シ貳寸三分（約7.0センチメートル）の鏡有、裏ニ繪有、糸ヲタクミユイ申候ヤウニ見へ申候、高つき壹ツ、大矢根壹本、三寸、廣サ壹寸一分有、鎧板一枚、貳寸八分、横八分、此外ニ鎧破レ貳拾貳、太刀ノ折一ツ、ツカノ方一ツ有」とある。

「湯津神村車塚御修理」は、前述の如く、大金重貞の筆になるものである。同書に依れば、下侍塚の規模は、「右ハ高サ五間、山頭八間四方、北より南へハ地形廿一間、東より西へハ地形貳十五間、^{前へ}築出十五間、前横ニ築續土手有、長十三間」と記載されている。そして、出土遺物は、「此塚五尺堀申候へハ、五寸貳分（約15.8センチメートル）鏡、甲破レ、鎧破レ、太刀ノ折拾五、此外ニ陣ナタノ如ナルモノ貳ツ有、ホコノやうニも見へ申候、高つき四ツ、高四寸五分^{○下六}おき付、三寸五分鉢の指渡八寸、塚ノ頭より五間堀入テ、四尺余ノ鉄ノスマノ如クナル器有、其内ニ漆ノねり土ノやうナルニテ積申候、其内ニ又鉄ノ器有、長三尺、横壹尺八寸、是ハ黒土ニテ漆ノねり土ニテ積、中ニ壹尺四方計も可有之、茶くり有、其内ニ水有、築出ノ土手横土手ヨリ花ヒン出申候、（中略）是ハ川上ノ塚也、此塚ヲ世ニ下侍塚と申傳也、是ハ車塚と云也、築續土手ニ高サ九寸、指渡シ壹尺、中ノクビレノ廻壹尺四寸五分有、其外陣なた折レヨウ成物貳ツ花ひん出ル」と記述されている。

ところが、「湯津神村車塚御修理」には、それぞれの図が付されている。しかし、図は、いかなる理由によるかを明確化し得ないが、全く本文と逆になつてゐる。すなわち、上塚（上侍塚）からの出土遺物は、「五寸貳分鏡シヤクトウイロ、是ハ興米ノ色花ヒン、高トウ四ツ、鉄ニテ如此也、ホコノ折ヤウニテ中ニ柄折有赤サヒ、太刀折、鉄陣ナタノヤウニテ人不知赤サビ、太刀柄ヤウニテ衣ヲ以如此卷申候跡有赤サヒ、シヲテノ指ヤウ也」の九点を図示している。ま

た、下塚（下侍塚）からの出土遺物は、「シヤクドウ鏡、トイロソコナシ人不知、ヤキモノクタ貳ツ、ヤノ根貳ツ、ホコノヤウニ見ル、鉄赤サヒ人不知、鎧板」などを図示している。

大金重貞が著した『那須記』には、「下車塚の地形南北十二間、東西八間の古塚を掘しに中より高サ九尺指渡し一尺中程のクビレ周一尺四寸五分花瓶と思き物出る即古代の陶器にして素燒也、左に圖有、又上車塚ハ南北十二間、東西八間此塚より掘りし物は矢の根十八本市寸一分鎧板三十五枚青玉の管二ツ、鉢の折、太刀の折、鏡大小二面、大矢の根一つ其他種々の物掘出せしが其形不分明・・・」と記載されている。さらに、同書には、上侍塚・下侍塚の出土遺物の図が一括して付されている。同書の図は、「古鏡二面・太刀折・陶器・札鎧・矢ノ根二本・太刀ノ鞘・青玉二個・砥石之器・陶器花瓶」の10点である。そして、「其他種々の物掘出せしが其形不分明・・・」とあるように、省略されたものがあることが知られる。このことは、「湯津神村車塚御修理」の図によても明らかである。

「湯津神村車塚御修理」と『那須記』は、同一人の筆になるものであるが、このなかにも差異が見られる。下侍塚から出土の遺物としては、後書では、花瓶しか記載されていないが、前書に依れば、このほかにいくつか出土している。この差異は、一応、後書の省略によるものと判断することができる。だが、両書に掲載されている遺物のなかにも、相違が見られるのは、何故か判断に苦しまざるを得ない。鏡は、前書に依れば、上侍塚・下侍塚から一面ずつ出土しているが、後書に依れば、大小二面が上侍塚から出土しているのである。また、前書には、本文と図とが逆転しているという不備が見られるとともに、後書にも、上侍塚・下侍塚の大きさを同一に記載しているという不備な点も認められる。以上、見てきたように、両書間には、それぞれ相違が窺われる所以、ことは面倒となる。ここでは、前書の本文が最も信憑性が高いということを前提として、筆を進めて行くことにしたいと思う。

「湯津神村車塚御修理」の本文に依れば、上侍塚出土鏡は、「指渡シ貳寸三分ノ鏡有、裏に繪有、糸ヲタクミユイ申候ヤウニ見ヘ申候」とある。図もまた、「シヤクドウ鏡」と題名がつき、二重の弧線（縦状）でもって12区画されていて、各区には、平行な弧文（横状）の鋲出が見られ、その外側には、鋸歯文圏が囲繞する。「糸ヲタクミユイ申候ヤウニ・・・」という文章には、この種鏡の特徴がよくとらえられている。本文と図に依れば、この鏡式に近い鏡は、当然のことながら、獸形鏡から変化した捩文鏡であろう。先学の業績を見ると、三木文雄氏⁶⁶は、鋸歯文鏡が捩文鏡としていて、斎藤忠氏⁶⁷は、捩文鏡としている。筆者⁶⁸もまた、二氏の説を踏襲して、捩文鏡と見る立場である。『那須記』の図は、二重の弧線（縦状）でもって八区画されていて、各区には、平行な弧文（横状）の鋲出を示し、その外側には、幅広い鋸歯文圏が囲繞する。そして、後書の図は、前書の図に比較して、略化の程度が甚しい。両書の図では、一二区分と八区分との区分の相違が見られるとともに、鋸歯文圏の広狭の差が存することであ

る。

「湯津神村車塚御修理」に依れば、下侍塚出土鏡に関しては、本文は、「五寸貳分鏡」とあり、図もまた、「五寸貳文鏡シヤクトウイロ」という題名を付しているのみで、詳細な説明を加えていない。この鏡については、恐らくは、複雑な文様であり、説明を付すことができなかつたものかと思われる。さらに、複雑な図柄があるので、図示することも困難であったかと思われる。「湯津神村車塚御修理」と『那須記』の図を検討すれば、外側から見ると、鋸歯文圏・複波文圏・鋸歯文圏・櫛歯文圏の幾何学文とその内側の素文圏は、同様な状態に描かれている。内区の主文様は、描き難かったと見て、大差が認められる。前書では、正面向きの二獸面が見られ、ひとつは、外側から見る縦位の状態であり、もうひとつは、外側から見ると、横位の状態である。後書では、正面向きと側面向きの二獸面が見られ、外側の一方向から見る状態となっている。両書間には、獸面の位置が異なりを示し、同一人の筆であるのに、何故そうになったのかは不明である。両書には、獸面以外にも、種々の文様が描かれているが、何を模したものかを明確化し難い。このため、この鏡は、いかなる鏡式であったかを判然化し得ず、論者によって様々な鏡式が挙げられている。三木文雄氏⁶は、盤龍鏡としていて、斎藤忠氏⁷は、盤龍鏡か囂龍鏡かとしている。樋口隆康氏⁸は、二神二獸鏡の類ではないかとしているが、神像は描かれていません。筆者⁹もまた、それらの意向を勘案して、盤龍鏡（龍虎鏡）と見ている。この根拠は、二獸面から判断すれば、両頭式の盤龍鏡に近いと考えるからである。

V 『那須拾遺記』から見た出土鏡

『那須拾遺記』は、木曾武元の筆であり、享保一八（1733）年の自序がある。上侍塚・下侍塚の発掘後、40年の歳月が流れているので、何らかの参考文献がなければならない。当人は、那須の住人であるので、「湯津神村車塚御修理」・『那須記』を参考にしたものかと思われる。本書にも、両墳出土鏡などの図が掲載されているが、「湯津神村車塚御修理」に見られるように、本文と図とが逆転している。

上侍塚出土鏡は、「湯津神村車塚御修理」と同様に、二重の弧線（縦状）でもって区分されていて、各区には、平行な弧文（横状）が見られ、その外側には、鋸歯文圏が囲繞している。しかし、前書では、12区分されているが、『那須拾遺記』では、8区分されていて、区分としては、『那須記』の区分と同様である。本書の図は、いうまでもなく、「湯津神村車塚御修理」・『那須記』の図も参考にしたものかと思われる。下侍塚出土鏡は、「湯津神村車塚御修理」と同様に、二個の獸面が認められる。ひとつは、外側から見る縦位の状態であり、もうひとつは、外側から見ると、横位の状態である。主文様は、略化の獸面ではあるが、獸面の痕跡を留めている。この外側には、櫛歯文圏・鋸歯文圏・波文圏・鋸歯文圏が見られる。鋸歯文圏

は、両書の鋸歯文圏を模倣したものと思われるが、鋸歯文圏状ではなく、丸味を帯びたものへ変化している。主文様と文様圏の間には、両書と同様に、素文圏が認められる。

V 『下野國誌』から見た出土鏡

『下野國誌』は、河野守弘の著作であり、文久元（1861）酉年九月編集とある。上侍塚・下侍塚の発掘は、元祿五（1692）年であるので、170年の歳月が流れてから本書が著されたことになる。とすれば、本書を著すためには、何らかの参考資料がなければならない。この参考資料は、いうまでもなく、大金重貞の著作であろう。本書中では、「出自下車塚器物之圖」とあるのは、上侍塚の出土品の誤謬であり、「出自上車塚器物の圖」とあるのは、下侍塚の出土品の誤謬である。このため、本書は、「湯津神村車塚御修理」と同様な誤りを犯かしている。本書には、両墳出土の遺物をそれぞれまとめている。

『下野國誌』掲載の出土鏡は、略化の程度が甚しい状態を示している。上侍塚出土鏡は、「鏡赤銅色徑三寸三分」とあり、「湯津神村車塚御修理」中では、「指渡シ貳寸三分の鏡有」とあるので、大きさも異なっている。この鏡は、二重の直線（縦位）でもって八分割されていて、各区には、平行な弧文（横状）が窺われる。この外側の鋸歯文圏の幅も大であり、『那須記』の例にならったものではないかと思われる。下侍塚出土鏡は、「鏡赤銅色徑五寸貳分」とあり、「湯津神村車塚御修理」では、「五寸貳分鏡シヤクトウイロ」とあるので、大きさも一致している。本書の図は、「湯津神村車塚御修理」の図と比較すれば、粗雑な状態であり、略化の程度も甚しい。二個の獸面が鋤出されていて、ひとつは、外側から見る縦位の状態であり、もうひとつは、外側から見ると、横位の状態である。主文様は、もはや獸面とは見えず、二個の入面状のものへ変化している。外側には、櫛歯文圏・波文圏・鋸歯文圏が鋤出されている。「湯津神村車塚御修理」の図に比較すれば、素文圏・内側の鋸歯文圏が消失している。

VI 『葬礼私考』から見た出土鏡

『葬礼私考』は、栗田寛の著作であり、本書の付録として掲載されたものである。本書の付図の「古鏡及土器圖」中に、上侍塚出土品・下侍塚出土品が収録されている。斎藤忠氏⁶⁶に依れば、「栗田寛は安政五年（1858）彰考館に奉仕し、慶応三（1867）年彰考館物書役となっている」という。さらに、同氏は、「『葬礼私考』をあらわすに際して彰考館所蔵の図をもとにしたことを想定してよい。そうすれば、この図は、光圀が画師に命じて描かしめたものでなかつたろうか。栗田寛なら、これをできたわけである。もし、この推察が許されるならば、『葬礼私考』のものは最も拠るべき貴重なものである」という。

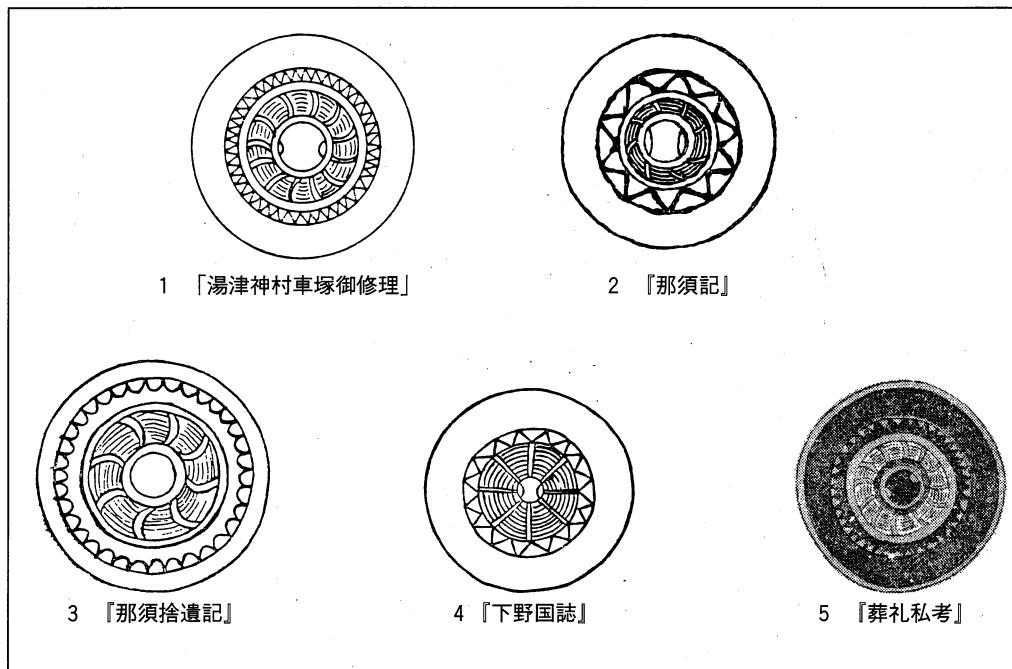
上侍塚出土鏡は、二重の弧線（縦状）でもって12区分されていて、各区には、平行な弧文

(横状)が見られ、その外側には、鋸歯文圏が鋲出されている。『葬礼私考』の図と類似の図は、いうまでもなく、「湯津神村車塚御修理」の図である。大金重貞は、発掘の当事者であり、光圏が西山から派遣した絵師が絵を描いたと仮定すれば、一致するのは当然のことであろう。両書とも、区分数を見ると、12分割されていて、区画数の一一致を見ている。内区主文様も類似性を示し、鋸歯文圏も同様な状態である。そして、前書の場合、着色が施されている図であり、後書の図より精度が高いということができよう。下侍塚出土鏡は、前書では、主文様としては、二個の獸面が鋲出されている。ひとつは、外側から見た縦位の状態であり、もうひとつは、外側から見ると、横位の状態を示している。そして、素文圏を挟んで、櫛歯文圏・鋸歯文圏・波文圏・鋸歯文圏が回繞している。本図に類似の図もまた、後書の図が挙げられる。両書の外区には、一重の波文圏と二重の複波文圏の相違が見られるにしか過ぎない。しかし、両書の図を判断すれば、内区主文様は、前書の方が後書より精度が高いかと思われる。前書の場合、二獸面以外には、獸形・鳥形の如きものも窺われる。

VII 上侍塚・下侍塚の出土鏡

さて、それでは、上侍塚出土鏡・下侍塚出土鏡は、いかなる鏡式の鏡であろうか。前述の如く、「湯津神村車塚御修理」の本文は、最も信憑性が高いと思われる。本書では、上侍塚出土品と下侍塚出土品とを区別して記述しているが、本文と図とは逆転している。『那須記』では、上侍塚出土品・下侍塚出土品は区別されておらず、両塚のものを一括して掲出されている。『那須拾遺記』もまた、両塚のものを一括して記載されている。『下野國誌』は、上侍塚出土品・下侍塚出土品をそれぞれ区別してまとめている。本書では、上車塚・下車塚器物の図が掲げられているが、「湯津神村車塚御修理」を踏襲していて、本文と図が逆転し、同様な誤謬を犯かしている。『葬礼私考』は、付図として、「古鏡及土器圖」を掲げているものであるが、全部着色である。

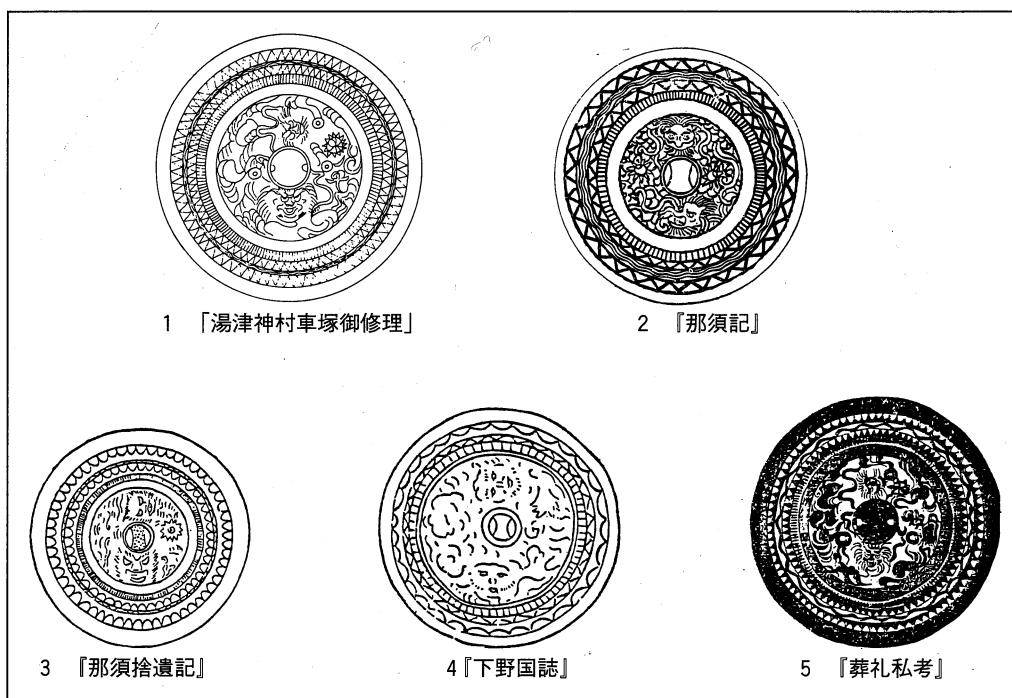
「湯津神村車塚御修理」・『那須記』・『那須拾遺記』・『下野國誌』・『葬礼私考』の図を比較すれば、上侍塚出土鏡としては、「湯津神村車塚御修理」・『葬礼私考』の二書の図が詳細である。このため、斎藤忠氏⁶⁰の指摘にもあるように、『葬礼私考』の図も、「湯津神村車塚御修理」の図と同様、参考にすべきものかと思われる。『那須拾遺記』・『下野國誌』の二書の図は、略化の程度が甚しく、「湯津神村車塚御修理」・『那須記』の模倣であろう。「湯津神村車塚御修理」・『葬礼私考』の二書の図は、著しい類似性を示し、二重の弧線（縦状）でもって12区分されていて、その外側には、鋸歯文圏が見られる。したがって、二書の図を参考にして、考察を加えると、上侍塚出土鏡は、誰もが指摘するように⁶¹、「湯津神村車塚御修理」の本文にも、「糸ヲタクミユイ申候ヤウニ見ヘ申候」とよく特徴をとらえていることからも、獸形鏡から変



第3図 上侍塚出土鏡

1 『栃木県史』史料編・古代、『栃木県史』資料編・考古一から転載

2 『那須記』から転載 3～5 『那須國造碑・侍塚の研究』から転載



第4図 下侍塚出土鏡

1 『栃木県史』史料編・古代、『栃木県史』資料編・考古一から転載

2 『那須記』から転載 3～5 『那須國造碑・侍塚古墳の研究』から転載

化した捩文鏡と見ることができよう（第3図）。捩文鏡は、いうまでもなく、仿製鏡であることを疑う余地がないであろう。

上侍塚出土鏡は、捩文鏡と考えられるが、下侍塚出土鏡は、いかなる鏡式の鏡であろうか。「湯津神村車塚御修理」・『葬礼私考』の二書は、前述の如く、詳細な図であり、当然のことながら、最も参考にすべき資料であろう。「湯津神村車塚御修理」では、図と本文には、「五寸貳分鏡シヤクトウイロ」と記載するのみで、詳細な説明を付していない。二書では、獸面のみが明らかな状態であり、他の部分は、何を模したかを判然し得ない。おそらくは、複雑な文様があるので、上侍塚出土の捩文鏡と異なり、説明が不可能であったかと思われる。『那須記』以外の「湯津神村車塚御修理」・『那須拾遺記』・『下野國誌』・『葬礼私考』の四書の図は、獸面の配置が同様に描かれている。ひとつは、外側から見た縦位の状態を示し、もうひとつは、外側から見ると、横位の状態となっている。『那須記』の場合、外側の一方向から見た縦位の状態となっている。『那須拾遺記』・『下野國誌』の二書は、略化の程度が甚しい状態を示し、後者の場合、獸面が人面に変化している。そして、『那須記』以外の四書の下侍塚出土鏡は、獸面を正面から描き出したものであるので、獸形を主文様とする系統の鏡であったかと思われる。獸形を主文様とする系統の鏡は、その候補として、三角縁神獸鏡・神獸鏡・二神二獸鏡・獸帶鏡・獸形鏡・鼈龍鏡・盤龍鏡（龍虎鏡）などが挙げられよう。「湯津神村車塚御修理」・『葬礼私考』の二書には、獸形を窺うことができず、三角縁神獸鏡・神獸鏡・二神二獸鏡の鏡式は、否定されねばならないだろう。三角縁神獸鏡は、主として、鏡径20センチメートル以上の大形鏡であり、下侍塚出土鏡は、鏡径15.8センチメートルの中形鏡であり、大きさも合っていない。獸帶鏡・獸形鏡は、獸形が側面向きに描かれているので、これもまた、否定されねばならないであろう。小林三郎氏⁶⁸は、鼈龍鏡を神獸鏡形式と獸形鏡形式の二形式に分け、後者だけを鼈龍鏡と呼びたいと述べている。鼈龍鏡は、前者の形式のものが主流であり、図も合わないので、これもまた、否定されねばならないであろう。最後に、下侍塚出土鏡の候補として、残ったものが盤龍鏡（龍虎鏡）である。盤龍鏡（龍虎鏡）には、後藤守一氏⁶⁹の指摘があり、盤龍鏡としては、四頭式盤龍鏡と両頭式盤龍鏡に分類されている。さらに、後藤氏⁶⁹は、高橋健自氏の見解を踏襲し、龍虎鏡とも呼称していて、龍虎の数によって双頭龍虎鏡と四頭龍虎鏡に分類し、外区文様によって唐草文縁・獸文縁・鋸歯文縁に分類している。大塚初重氏⁷⁰は、下野国の前方後方墳を小川支群と湯津上支群の二支群に分けている。大塚氏⁷⁰は、上侍塚出土鏡として、船載鏡・仿製鏡に触れていないが、盤龍鏡としている。樋口隆康氏⁷¹は、盤龍鏡を単獸式・両頭式・三頭式・四頭式の各形式に分類している。樋口氏⁷¹は、両頭式盤龍鏡には、両頭を相向う状態でもって配置した対向式と両頭を鉤を挟んだ状態でもって配置した旋回式に細分されている。下侍塚出土鏡は、鉤を挟んで状態でもって二個の獸面が見られるので、この主文様に

着目しねばならない（第4図）。したがって、下侍塚出土鏡は、鋸歯文縁の両頭式盤龍鏡（龍虎鏡）の可能性が強いかも知れない。この形式には、前述の如く、対向式と旋回式のものがあるが、下侍塚出土鏡は、いうまでもなく、旋回式の形式のものであろう。主文様の外側には、「湯津神村車塚御修理」では、素文圏が囲繞していて、『葬礼私考』では、着彩した素文圏が見られる。鏡では、文様圏ではなくして、幅広い素文圏が鋳出されている例がないので、これは、おそらく、銘文帯を示すものであろう。素文圏が銘文帯であったと仮定すれば、下侍塚出土鏡は、舶載の両頭式盤龍鏡（龍虎鏡）、さらに言えば、舶載の旋回式の両頭式盤龍鏡（龍虎鏡）と見ることができようか。

那須地域の前方後方墳では、舶載鏡としては、下侍塚出土の盤龍鏡（龍虎鏡）を別にすれば、八幡塚出土の夔鳳鏡⁶³・大塚出土の画文帯龍虎鏡⁶⁴の二面の鏡が周知されている。二面の舶載鏡が知られているので、舶載鏡がさらに増加する可能性が強く、盤龍鏡（龍虎鏡）もまた、舶載鏡の可能性が強いかも知れない。同地域では、盤龍鏡（龍虎鏡）を加えれば、三面の舶載鏡の出土例が知られることになる。盤龍鏡（龍虎鏡）には、「健安元年」・「元興元年」・「永年三年」・「永平七年」・「元初元年」・「章和二年」などの紀年銘を刻したものがあるが、これらの紀年銘は、いずれも後刻であるという⁶⁵。盤龍鏡（龍虎鏡）の製作年代は、平縁で両頭式・三頭式のものが古く、他形式は、それから発展・便化したものという⁶⁶。そして、下侍塚出土鏡は、舶載の旋回式の両頭式盤龍鏡（龍虎鏡）と想定し、後考を俟ちたい。

註

- (1) 山越 茂 1981 「前期の古墳・「中期の古墳」『栃木県史』通史編1・原始古代一 栃木県史編さん委員会
- (2) 山越 茂 1976 「亀の子塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
- (3) 山越 茂 1976 「浅間山古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
- (4) 山越 茂 1976 「入定塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会

小貝川東岸域に所在する入定塚については、前方後方墳という筆者の見解に否定的な論者もいる（小森哲也 1985「入定塚古墳」『益子町史』第一巻考古資料編 益子町史編さん委員会）。小森氏は、「現況では、墳丘実測図（第2図）にも表れているように「後方部」稜線が流れ、「くびれ部」が明確でなく、「前方部」も平坦である。また前述したようにやせ尾根上に築造されているため、東西は急斜面となり、墳裾を明確におさえることは困難である。ただし、北端には尾根を切断した部分が観察され現在山道が通っている。現状から判断するならば、古墳であるかどうか疑問が残る。むしろ、円通寺に付隨する施設の可能性が大きい」と述べている。小森氏は、自分で墳丘測量図を作成しないで、筆者の墳丘測量図を使用しながら、否定するのは先人に対して失礼にあたろう。どのような見解を持とうが、当人の自由であるが、自分で測量図を作成して、否定すべきものは否定すべきであろう。

筆者は、二度に渡った墳丘測量調査に依れば、前方後方墳であったと確信している。筆者は、以前に、

「同墳は、県内の前方後方墳中、山地上というきわめて高い位置に立地する唯一例としても注目される。そして、同墳は、古式な墳丘を示す上に、尾根筋を切断するという原始的な方法によって築造された可能性が強く、盛土の量は僅少ではないかと思われる。筆者は、(中略)高位立地を示すとともに、尾根筋を切断して構築された墳墓であること、墳丘の形態が前期の前方後方墳となる茨城県勅使塚古墳に類似することなど、古式な様相が強く、前期形式のそれと見た方が妥当ではないかと思う」(山越 茂 1981 「前期の古墳」『栃木県史』通史編1・原始古代一 栃木県史編さん委員会)。さらに、本墳の北側・隣接の位置には、入定塚北塚とでも呼称すべき小規模な墳墓が存在している。入定塚北塚は、墳丘測量図に依れば、方墳の可能性を指摘し得るようになってきた。入定塚北塚が方墳であったとすれば、前方後方墳と方墳の共存性という観点から見て、本墳の前方後方墳の可能性が一層強まるであろう。小貝川を挟んだ西岸域には、前方後方墳の浅間塚が存在している。本墳から見て、南側・約800メートルの位置には、山の神塚が所在している。山の神塚もまた、墳丘測量調査に依れば、方墳であることは疑問の余地がない。

また、五行川上流域では、前方後方墳の浅間山の前面には、小規模な方墳が確認されている。五行川下流域には、前方後方墳の亀の子塚が存在している。本墳から見て、南側・約200メートルの位置には、亀の子塚南塚とでも呼称すべき墳墓が確認されている。亀の子南塚もまた、墳丘測量調査に依れば、方墳の可能性を指摘し得るようになってきた。

芳賀地域にも、前方後方墳と方墳の共存関係が見られるようになってきている。二墳形の共存関係は、これまでには、那須地域に指摘し得る状態にしか過ぎない。那珂川流域では、前方後方墳の温泉神社の周辺には、22基の方墳が指摘されている(真保 昌弘 1999 『那須吉田新宿古墳群発掘調査概要報告書』 栃木県小川町教育委員会)。同地域では、二墳形の共存関係は、那須地域のような大規模なものではないが、この関係を指摘できよう。このように見えてくると、入定塚は、前方後方墳の可能性が一層強まることができよう。

- (5) 山越 茂 1979 「前方後方墳の新資料・浅間塚古墳」『栃木県史研究』第18号 栃木県史編さん委員会
- (6) 山ノ井清人 1984 「山崎古墳群」『真岡市史』第一巻 考古資料編 真岡市史編さん委員会
- (7) 小森紀男ほか 1993 『栃木県上根二子塚古墳群測量・発掘報告』 市貝町史編さん委員会
- (8) 三木文雄・村井 崑雄 1957 『那須八幡塚』 小川町古代文化研究会
- (9) 大川 清・河野真理子 1991 『栃木県小川町吉田温泉神社古墳墳形確認調査報告』 小川町教育委員会
- (10) 三木文雄 1976 「駒形大塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
三木文雄 1986 『那須駒形大塚』 吉川弘文館
- (11) 三木文雄・村井 崑雄 1957 『那須八幡塚』 小川町古代文化研究会
山越 茂 1976 「上侍塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
- (12) 三木文雄・村井 崑雄 1957 『那須八幡塚』 小川町古代文化研究会
山越 茂 1976 「下侍塚北古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
- (13) 三木文雄・村井 崑雄 1957 『那須八幡塚』 小川町古代文化研究会

- 山越 茂 1976 「下侍塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
- (14) 山越 茂 1981 「前期の古墳」『栃木県史』通史編1・原始古代一 栃木県史編さん委員会
久保哲三 1990 『茂原古墳群』 宇都宮市教育委員会
- (15) 久保哲三 1990 『茂原古墳群』 宇都宮市教育委員会
- (16) 山越 茂 1981 「中期の古墳」『栃木県史』通史編1・原始古代一 栃木県史編さん委員会
- (17) 山越 茂 1977 「下野国前方後方墳私考」『栃木県史研究』第14号 栃木県史編さん委員会
水沼良浩 1992 「三王山南塚一号墳」『南河内町史』史料編・考古 南河内町史編さん委員会
- (18) 水沼良浩ほか 1992 「三王山南塚二号墳」『南河内町史』史料編・考古 南河内町史編さん委員会
- (19) 前沢輝政 1977 『山王寺大樹塚古墳』 藤岡町教育委員会
- (20) 山越 茂 1979 「観音山古墳」『栃木県史』資料編・考古二 栃木県史編さん委員会
- (21) 斎藤 忠 1986 「侍塚古墳出土品」『那須国造碑・侍塚古墳の研究』 吉川弘文館
- (22) (8)と同
- (23) (21)と同
- (24) 山越 茂 1976 「上侍塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
- (25) (8)と同
- (26) 斎藤 忠 1963 『日本の発掘』 東京大学出版会
- (27) 斎藤 忠 1986 「侍塚古墳出土品」の中に、下侍塚出土鏡について、「樋口隆康氏の意見を聞いたのであるが、あるいは二神二獸鏡の類ではないかともいっている」と述べている。
- (28) 山越 茂 1976 「上侍塚古墳」・「下侍塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
- (29) (21)と同
- (30) (21)と同
- (31) 三木 文雄・村井 富雄 1957 『那須八幡塚』 小川町古代文化研究会
斎藤 忠 1986 「侍塚古墳出土品」『那須国造碑・侍塚古墳の研究』 吉川弘文館
- 山越 茂 1976 「上侍塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 栃木県史編さん委員会
- (32) 小林 三郎 1971 「鼈龍鏡とその性格」『駿台史学』第28号 駿台史学会
- (33) 後藤 守一 1926 『漢式鏡』 雄山閣
- (34) 後藤 守一 1942 『古鏡聚英』上篇 大塚巧藝社
- (35) 大塚 初重 1956 「前方後方墳の成立とその性格」『駿台史学』第6号 駿台史学会
- (36) (35)と同
- (37) 樋口 隆康 1979 「盤龍鏡」『古鏡』 新潮社
- (38) (37)と同
- (39) (8)と同
- (40) (10)と同
- (41) (37)と同
- (42) (37)と同